

授業レポート

感情 **3**年生

「夜の木」のイメージネーションを語り合う

教材 子どもの「夜の木」の作文 中川 節子

1. はじめに

本会主宰であった上原輝男先生はイメージについて次のように語っています。

「イメージが我々を行動させるのです。実は考えてみると、現実の中にイメージ世界があるのではないのです。我々のイメージが、我々の現実世界を誘導していると考えなければならぬのだと思います。」

(平成五年・玉川大学講演)

また藤岡喜愛先生はイメージについて

「イメージというものの、特にわれわれ自身に大事なイメージ、われわれの行動を指導しているような、まあいわば、しゃかりきにえっさえっさと何かやるとき、それを衝き動かしている、その時に抱かれているイメージというものは、単に絵に描いているような、あるいは映画を眺めているようなものではなくて、むしろ身体感覚まで巻き込んで、もう身体イメージそのものに化けている、イメー

ジかその人間か、もうわからんようになってる。」⁽¹⁾ と言い、「人間はイメージを蓄えた世界⁽²⁾のものであり、いわばイメージ・タンクである」とまで言い切っている。

子どももまたイメージ・タンクです。いや子どもであればさらにそのイメージは、大人とちがう形で広がり伸びていくのではないのでしょうか。そこが今回の授業のポイントです。

2. 指導案抜粋

(1) 日時 平成23年2月22日(火)

午後1時35分～2時20分

(2) 児童

東京都町田市立小川小学校
3年2組(川崎幸太・中川節子学級)

男子20名 女子20名(計40名)

(3) 教材 児童作文「夜の木」

(4) 授業テーマ

「夜の木」のイメージネーションを語り合う
—子どもたちの「夜の木」の作文を読みながら—

(5) 「夜の木」の作文分類と教材化

(1) 生命力を持つ木(生命力からお守りの木)と題する作文もあり。 9名

(2) 生きものと木(動物たちの木) 7名

(3) 夜の空間を移動する木(うごく木) 6名

(4) 夜と木が作る自然の音のこわさ・驚き(こわい木) 5名

(5) 存在の静寂さ(静かな木) 3名

(6) 木の時間と自分の時間を重ね、時をふり返る(思い出の木) 1名

(7) 仮想の逍遥Ⅰ(夜のさんぽ) 1名

(8) 仮想の逍遥Ⅱ(俯瞰を伴うさんぽ) 1名

その他

- ・木が家（2名） 光る木（2名）
- ・木にまつわるお話（2名）

その他のものを除いては、夜の持つ静と動、木の持つ生命力、時間、夜と木のこわさと、神秘、不思議さを書いていきます。(1)～(6)までは二時間目（前時）で取りあげ、その代表作に対し、全体を包み込むイメージを、題名をつけることで共有しました。その時、子どもたちがつけた題名が（ ）の中の――を引いたものです。（取り上げた作文は、資料として、最後に掲載）

(7)(8)の二作の仮想の逍遙を本時で取り上げ、心の中にある夜のイメージ・シーンを共有する授業を計画しました。

(6) 単元設定の理由

上原先生の言葉です。

「我々人間のイメージは見た限りの事しかイメージ化できないものではない。特に子どもは、いっぱい見えていないものを見ているんだよ。おぼけの世界なんだよ。だからこそ、あの怪獣ブームが生まれてくる。そうだとしたら、彼等、子どもたちは完全に夜のイメージを持っている。それを我々は覗こうじゃないか。」

（昭和五十八年台宿）

「やみ夜だって真暗らばかり考えちゃいけない。魔物がいる世界がやみ夜でね。動きのある活力のある方がやみなんですよ。略…やみっていうのは、いやーみ（いりよくのあるかみ）、生命力を持つている神様ですよ。」

（平成六年台宿）

この言葉が、いつも頭の中に残っていました。夜をどう子どもたちが心象に映しているのか、それを明らかにするために「夜の木」という題を設定しました。子どもたちが作文を書くことで、「夜の木」のイメージ・シーンがどう発動し、流れていくかをまず見届けます。そして次に読み合うことで、お互いの心象風景をどう見ているかを確かめ合うこと。これがこの授業設定の理由となります。

本時では仮想の中を逍遙している(7)Fさんと(8)H君の作文を取り上げます。理由はこの二つの中に前時に取り上げたクラスの人たちの夜のイメージが随所に入っていると同時に、新しいイメージの捉え方があるからです。

一人目のFさんの作文は自分では、夜の木（雨のふった後の木）と題しています。夜から雨を想い、木から巨木を想う。その巨木は自分の心の中にあるいつもの木という前提です。いつもその巨木まで行き散歩をしているが、その日は巨木から先に違う道を選ぶ。いつもと違うということにときめきながら、歩

くと、さらに大きな巨木に出会う、それは天まで届くような木で、作者はこれを天の使いとイメージしています。ここで今まで水平だった視点が見上げる視点へと変わります。まさにFさんのイメージがさらにイメージを呼ぶというところです。このFさんのイメージ・シーンの流れにどう対応するか、Fさんのイメージがさらに伸びるところで文を切り、子どもたちにイメージを語ってもらいます。

（この文につけた木の絵はうすい鉛筆で、ぼかして描かれていました。「あんまり濃く描きたくなかったの。」と、その木の幽玄さを損ないたくなかったのでしょう。）

二つ目のH君の作文は同じ逍遙でも視点の移動のある散歩です。全体が三連の詩の形となっています。（提出してきた時、「詩みたいにしてみたんだけど。」とことわっていました。）私はこの文章を一連ずつ分けて提示することにしました。一連目は、夜からその時刻を想定し、静寂な町並の散歩を描いています。風 すき間 木 を空欄にし、そこにこのH君のイメージに他の子どもたちはどんなことばを想うことができるかを見たいと思いました。さらに二連目のフレーズは今度は視点が上空に飛び、ここからは俯瞰で生きものたちの情景が描かれます。水平の視点から垂直にのぼる空からのイメージであることがと

れるかを、眠っている まど 赤子 を空欄

にし、ことばを入れることで、イメージの流れを感じとれているかをみます。勿論このことばは各々の子どもたちの考えたことばでいいのです。H君の考えたものところがとても、子どもたちの感情がたち上ってくればいいのです。三連は、木にもどり、さらに意外な方向へとイメージが流れます。ですからここは、二連最後の文「子どもたちの夢はやすらかに」に続く文を考えさせ、三連はかくします。H君の作文を借り、自らのイメージ・シヨンの発動を試みてもらうように考えました。あくまでも二人の作文をたたき台として、自分たちのイメージ・シヨンの伸びや広がりを目を確認するためにこのような方法を採用します。

(7) 指導計画 (三時間)

(一) 「夜の木」の作文を書く (一時間)

(二) 作文を読みながら「夜の木」のイメージ・シヨンを語り合う (二時間)

1、作文 (分類(1)~(6)) 使用し、題名をつけながら、その夜の木のイメージ・シヨンを語り合う

2、二つの作文 (分類(7)(8)) を使用し、「夜の木」のイメージ・シヨンを語り合う (本時)

(8) 本時の目標

「夜の木」のイメージ・シヨンを語り合う
— 子どもたちの「夜の木」の作文を読みながら —

3. 授業記録抜粋・考察

紙面の関係でポイントとなる児童の発言・やりとりのみの抜粋です。

* 師は実名を漢字で表記し児童は仮名を平仮名で表記しています。

* 文中のイメージ・シヨンとイメージは同意として使っています。(文脈のつながりで)
* 「↓」のあとに書かれているのは、そこまでのやりとりに関する補足や考察です。

〈展開1 導入〉

前時のふり返りで、作文と題名の照合をし、学習のねらいを確認する。

〈展開2〉

Fさんの作文① (途中まで) を提示し、くり返し出てくる言葉は○で囲み、気持ちや心に感じた言葉、体へ感じた言葉には〴〵をつけながら読むことを指示し発表する。

(プリント配布)

Fさん作文①

ザーザーザー雨があつた後だった。

雨がやんだのは、夜だった。夜の外に出てさんぽをした。いつものさんぽコースとはちがう感じがした。それは夜だったからだ。やつといつものきよ木についた。きよ木からは、いくつかの水てきが落ちてきた。そして、きよ木から落ちた葉っぱはしめつていて、いつもよりふかふかしていた。

今は夜だからこのきよ木もいつもと少し感じがちがった。なんとひょうげんすればよいのだろう。たくましいようで悲しそう。一本の木なのに、いろいろな感じが出ている。ふしぎだな。いつのまにか、いつもの分かれ道についた。いつもは右に行っているけれど、今日は左に行ってみよう。ぼくはいつもとちがう道に行くことした。ちがう道には、なにがあるのか、ぼくはドキドキした。そこをどんどん進んで行くと、ぼくはすごいこうけいを目にした。

(くり返し・感じた言葉の発表)

こう きよ木
はな ちがう 4

けん	いつも	7
あみ	道	3
めい	夜	4
せい	感じ	3
わく	雨	2
じん	ぼく	3

けん たくましいようで悲しそう
てつ どきどき
こう すごいこうけいを目にした
わく ふしぎだな

↓くり返し出てくる言葉や感じる言葉を出す
ことにより、その言葉が、イマジネーションの
きっかけや、流れになりこの夜の世界を作りあ
げていることに意識を向けるようにしました。

中川 たくましいようで悲しそうなのは何の
こと

けん きよ木のこと

めい きよ木のことを言っている

中川 どきどきは

はな ぼくがどきどきしている

中川 では、ここまでの文がこんな感じの世
界をもっているなとわかる題名をつけてみ
ましょう

けん 「たくましいようで悲しい一本の木」

あい 「ふしぎなきよ木」

たか 「ぼくの夜のさんぽ」

↓きよ木にまつわる題がどんどん出てきたの
で、さらにこのイメージがどうふくらむか、
次に進みました。

中川 ぼくはすごい光景を目にしたとありま
すが、どんな景色を見たのでしょうか。
こう 左から（いつもとちがう道）から帰っ
ても、家にもどれたのがすごかった。
けん ものすごく大きい木々のあつまったの
を見た。

（他の子どもたちも、そうそうとうなずき、
「きよ木」「きよ木」と叫んでいた）

↓大きな木のイメージがふくらんでいきま
す。さらに作文のつづき②に進みます。

作文②

さつきのきよ木よりも、はるかに大きな
木があった。ぼくはあまりの大きさに、
「あつ。」
と、声をもらしそうになった。その木は、
まるで、

（「まるで何のようだったのでしょうね。」と、
うながし、この続きを書き、発表する。）

ゆか まるで神様のように大きかった。
てつ 何百本もの木が合体してできたような
木が根っこをはりめぐらしている。

こう 神様に、まぼろしを見せてもらったよ
うな気がした。

あお すごく、かがやいているよう。

（見た光景にびっくりしたように）

「キヤ〜〜」（大声で叫ぶ。）

全員 （大笑い・騒然。）

↓美しく輝いている様子が言葉では言えない
ので、思わず、感嘆の声で「キヤ〜〜」と
言ったのだと思います。ここで、皆の固さも
取れ、自由にものを言って良いんだという雰
囲気になりました。夜のけしきに、天に届く
木を想像し、それに神を感じる。木は上だけ
でなく下にも伸びる、それに伴い想像も上下
にと伸び広がっていくということでしょう。
いつもとちがう光景の中に自分の力以上のもの
を感じ取ったのだと思います。

（作文③を提示）

天の使いのように、天に届かんばかり
だった。その木のすき間から見える星の光
は、とてもきれいだった。夜のさんぽもす
ごくいいものだった。

（Fさんの作文を他の子どもたちのことばも
入れながら、全員で最後まで読む）

↓Fさんの作文に発表してくれた子どもたちの言葉を入れながら読んでいきました。そうすることで、子どもたちのそれぞれのイメージが重なり合って、一つのイメージの世界を再確認できるのではないかと思っただけです。すると、その木はまるであたりから、皆の音が段々と大きくなり、「キヤ〜」で絶頂となりました。Fさんの夜のイメージネーシヨンの世界を共有できたと思いました。

(発表しなかった子どもたちの中からイメージネーシヨンの広がりあるものをあげます。)

○さっきの巨木が大きくなったときのすがたみたいだった。ぼくはひっくり返りそうになった。木の下には小さなたて札があった。それにはこう書いてあった。

「これは神様の木」

ぼくは、またひっくり返りそうになった。

○伝説のようにとてもきれいだった。満月がその木の上にあるのでとてもきれいだった。

○自分の気持がつまってようだった。

○天まで届きそうな木だった。ぼくは登って

みた。自分がちっぽけにみえた。

〈展開3〉

H君の文は三連の詩の形をとっているので一連ずつ、とり上げていく。

一連目

時計の針が、二本、十二を向く
夜の①□が、町をやさしく包む
木々の葉の②□には、
月明かりの花が
時々人が通っても
見上げるのは、輝く空
見慣れた③□など見向きもしない

(音読したあと、□の中にあてはまる言葉を考え発表する。)

①□

夜の光 (かん)

月 (たか)

星 (れな)

空 (くみ)

↓風 (以下作者の書いたものはこのように書く)

光も月も星も空もどれもイメージの広がりがあると思いました。風を提示したとき、「動きが感じられる。」とつぶやいていた

子がいきました。

②□

木々の葉の あいだ (りか)
すき間 (なつ)

かつ 前 (Fさんの文) のとにている。木々のすき間から見える光

↓すき間、ほとんどの子が、すき間やあいだを入れていました。Fさんの作文がちゃんと頭にあり、この作品にも徐々に心が乗り移っていつているようです。ただの言葉のあてはめではなく、全体の文から考えるように促しました。

③□

見なれた人 (かん)

空 (かつ)

町 (てつ)「ぜったいに」

月 (けん)「あかりかな?」

木 (なつ)「木々があるから。」

中川 なんて木なの
なつ 木々があるから

↓木。これは愚問でした。イメージが湧いてくるということで、理由はなかったのです。

二連目

夜行の鳥が羽音を立てて去っていく
人も、モグラも、ヒバリも、虫らや魚
クジラにイルカ、サメも
しずかに、しずかに①
木や林や森たちは、ただ立ち
②
を見つめる
遠くで③
の泣く声とする
子どもの夢はやすらかに

①
なつ しずかに しずかに ねむっている。

C (多数) ねむっている (口々に言う)

↓眠っている。ほとんど全員が作者と同じ
でした。「静かに」のフレーズにさそわれた
のでしょうか。

中川 さあ、二連目の作者はどこにいるの
てつ 空。

とも 天国行き。

たく だから生きものがみんな見えるんだ。

↓視点の移動を押えたくて聞いてみました。

皆、上空からの視点だということがわかった
ようです。イメージは空へと飛びます。

②

あい 空

いと 町

りか 地面

ゆう 遠く
だい たぶん、遠く だな

↓まど。「えー、まど」「他の家のまどか。」
等の反応がありました。

③

こう 子ども

さき 赤ちゃん

めい そうか、赤ちゃんか

けん ふくろう

まき 人

↓赤子。赤ちゃんなんです、赤子と書いて
ありました。さきさんは赤ちゃんを入れて
くれました。この場合、動物―人―赤ちゃん
とたどったと思うのですが、なぜ赤ちゃん
なのかを聞かなかったことを悔やみました。

「あーやつぱり。」と言っていた子はいまし
た。言われてみれば、ということなのでしょう
う。人から赤ちゃんを想像するということ
は、夜の灯のついている家庭の中まで想像し
て初めて見えてくるもののように思います。

(二連、二連に続く三連を想像して書く)

↓一連の夜の景色から、二連は視点が上が
り、生きもののそして人間の夜です。H君の

詩を借りて最後はどこにイメージをもってい
くでしょうか。以下五分位で書いた子どもた
ちの文章です。最後にH君の三連目を載せま
した。

○子どもは眠る ○かなう ○ねむりにつく

○みんなしずかに

○世界の子どもはねむりにつく。

○とてもいいゆめをみそう。森も動物もしず
かにねむっている。

○時計の針が12と1を指している。赤子の泣
く声もなくなつた。世界中の皆が眠つた。

○気持ちよくねむっている。

○夜が明けるまで子どものいいゆめを

○赤子はゆめを見ている。赤子のゆめはどれ
もいいゆめだ。

○きょうも空は町を見守っている。

○お母さんが見守っている。

○つづいていく。○つづくといい。

○動いていく。

○夜はしずかで、いい感じ。

○夜明けは明けていく。太陽とともに大きく
大きく高く高くなっていく。

○夜はすこしずつ、終わっていく。

○さめていく

○消えていき、夜明けが近くなっていく。

○かなえましょう。そして喜びを与えよう。

○いのつっている。(同種省略)

三連目

木々は、夢さえないのか
木々は 動物の話を知らない
知る由もない
たとえ、月が落ちたら、
切られるかもしれないということさえ

(H君の文そのまま、読めない漢字にはルビをふりました。)

↓見守り、静の世界に動をおさめ、さらに夜明けで未来への明るい世界へのイメージが多いようでした。H君だけは、夜の木に再び焦点を合わせ、この静けさの中に潜んでいる木が切られてしまう危い予感を秘めているように思いました。二人の「夜の木」を通して、子どもたちは、自分の書いた文章以外にも、別の方向にイマジネーションを発動することができたように思います。秦恭子さんが、見言態の授業を称して言って下さった心に遊ぶ授業ができたのではないかと思います。

5. おわりに

授業後の協議会の意見です。

○子ども達に書いてもらった作品を我々が並べる。並べたものを教室に持ってきて、今

日の授業をするわけだけれども、(学習院の長浜君もよくやっているけれど) そうやって並べてやることで、子どもたちが同じ方向へ向っていく。そうすることで、同じ発想の形になっているのだと思う。今日なんてその方法だからH君の下界を見ると、いうその発想が自分の中にあるものだと気付くことができたんだと思う。(葛西)

○「勉強は教えるのではなく自らが学び取る」その裏付けをしてもらえた気がします。

(1) 子どもの作品を教材化したこと

(2) 子どもの意見を交通整理していくこと

(きょうの場合は を使い子どもを追いつめる)

(3) 子どもたちの発言と全体とのつながりを考えさせる。

授業を行う上で、この三点がきちんと出来ていれば、子どもたちは自分から考えるようになると思います。(武村)

○「キヤー」って言ったでしょ。あれがすごいと思う。FさんやH君にしても、すごくおもしろいんだけど、まだ自分たちの心象風景をばらまいている。輝く言葉をいっぱい持っているんだけど、持っているのはしんどいという状態なんです。それに対してA君は「キヤー」がやいている。」

と言った。そこで思いを言えばいいんだってことがわかったんだと思う。それまで固かったんだけど、あの時ほぐれた。救われたね。

きょうの授業のやり方で誤解されやすい部分があります。それは にあてはめるというやり方です。よく有名な詩人の作品でやる場合がある。それはやっぱり詩人はすごいね。私たちが思いつかないことを思いつく。すごいねって、でもきょうのは違いますよね。この授業でやりたいのはひとりひとりの子どもたちの心象風景を出したい。ということだと思います。FさんやH君の詩を、たたき台にただけなんですよね。この二人は、ある方向をガンと見ているので、より強いイメージ性がある。他の子どもたちも何を見ているのかということ、結局、自分の心象風景を見ていたということなんです。あくまでも、子どもたちはこの夜の世界の位置付けを作ってほしい。あなたたちが見ているはずのものをもう一回ちゃんと見てほしい。あなたたちそういうところあるよ。と。それはたぶん、あなたたちの根っこだよ。この根っこ、しっかり持っていれば、たぶんまっとうに生きていくことができるよ。って、そういうことだと思うんです。(広島大学・難波博孝)

授業形態についてと、きょうやりたかった授業のねらいとをしつかり話していただけたと思います。

生きていく力の根にあるものは、自分自身のイマジネーションの力だということを再確認しました。

(資料)

前時に使用した作文と
授業中に付けた題名

(1) (動物たちの木)

ある木がおいしげつつている森の中心に、大きな木がありました。その木には夜になるといろいろな動物があつまります。フクロウやホタルなどが集まります。木の下のように、こん虫のよう虫、クワガタ虫などいろいろきます。ときどき、キツツキもきます。

木の上では、いろいろな動物がねます。リスや、タヌキなどがねます。その木はまるで、動物たちのパレードです。

(2) (動く木)

どんぐりの木は、夜になると動く。いろんなところへ移動する。近くで見るとこわい。葉っぱがゆれて、ゆうれいみたい。

でも、朝になるとものところにもどって

いる。りすやこん虫がどんぐりを食べに来る。でも、また夜になると動き出してこわくなる。

(3) (こわい木)

夜の木は風にふかれて、えだをざわざわゆらすと、えだがおぼけみたいになって、こわい。その木にふくろうがとまっていて、目も光り、こわそう——略——

(4) (しずかな木)

夜の木はしずかです。動物たちもねむって、しずかな森に夜の木が立っています。森の中で夜の木はしずかにゆれています。——中略——人間も動物たちもねむるころ、大きな夜の木はゆれながら、みんなのねむっているところを見守っているように、風でしずかに葉をゆらします。朝になったら、みんなが遊んでいるところを見ているのでしょうか。

(5) (お守りの木) 生命力

夜の森、その森のほこらに、大きな一本の木がありました。その木の葉はキラキラがやいています。その葉は多くの人のお守りにされています。——略——この木は特別な木なのです。きこりが切っても、ふしぎな力で、また生えてくるのです。

(6) (思い出の木)

ある夜の話です。

——略——しつかりした女の子がお母さんに「どうして木を切つてはいけなの。」と聞きました。するとお母さんは

「これは思い出がいっぱいつまっている木だからだよ。」

と、言いました。

「思い出？」

女の子は聞きました。お母さんはまた言いました。

「しかも、これはあなたが生まれた年に植えたんだよ。」

「そうなの？」

と女の子は言いました。女の子は今、十才です。この木は十年でこんなでかくなったんだ。と思いました

「わたしもこの木と同じくらい大きくなつて頭がいい子になるんだから。」

と、女の子はちかいました。

注

(1) 「世界の子ども文化」創元社
子どものイメージとその表現 (62頁)

(2) 藤岡喜愛著「イメージと人間」
(NHKブックス) (49頁)

(東京町田市立小川小元教諭)